國學院大學学術情報リポジトリ

Les votes des Elus Socialistes a la Chambre des Depute's de l'Affaire Dreyfus a la Grande Guerre

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 横山, 謙一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001158

ドレーフュス事件から第１次大戦までの社会主義派議員の代議院での投票行動（２・完）

――1906年－1910年代議院任期[(1)]と1910年－1914年代議院任期時代のフランス統一社会党 SFIO ――

横　山　謙　一

第２章　1906年の総選挙と第９議院任期 Neuvième législature における社会主義派議員の投票行動分析

第１節　第９議院任期における政治状況の全体的展望

1902年から1914年は、急進党が代議院で主導権をとる時代になる。また急進党とともにコンブ内閣とルーヴィエ内閣の与党「左翼ブロック Bloch des gauches」を形成したフランス社会主義諸党派は、ヴァルデク-ルソー内閣へのミルラン入閣の評価をめぐり1902年のリヨン大会で二分裂していた。しかし２つのフランス社会党は1905年４月24・25日のパリのグローブ公会堂 salle du Globe での党大会で統一社会党を創立し、急進党の連立政党ではなくなっていた。

1899年から1909年の間の時期は第３共和政でもっとも政権が安定した時代であった。この時期に２年以上続いた内閣が３つあった[(2)]。ヴァルデク-ルソー内閣は２年11か月、第１次クレマンソー CLEMENCEAU[(3)] 内閣とコンブ内閣は２年７か月続いたが、クレマンソー内閣の方が10日あまり長い。

1906年－1910年任期の時期の半分以上の時期はこの第１次クレマンソー内閣の時代であった。1892年にパナマ事件に連座して政界から失脚し、ゾラの『私は弾劾する』の記事を彼が編集する「ローロル l'Aurore」紙に掲載してドレーフュス事件の渦中の人物となり、この事件を契機に再生の手がかりをつかみ、1902年ヴァル Val 県の元老院議員に選ばれて政界に復帰した。1906年に首相の座につくまでは、かなり長い道のりがあり、クレマンソーは既に65歳になっていた。

クレマンソーはサリアン内閣の内務大臣として、病気の首相を押しのけ、この内閣を取り仕切った。しかもサリアンはクレマンソーを後継者としてファリエール大統領に推薦し、1906年10月第１次クレマンソー内閣が樹立した。この時最大与党の急進社会党のリーダーはコンブとレオン・ブルジョアが実権を失っており、首相の人材はクレマンソーをおいていなかった。

クレマンソーの政治として人々の耳目を引くのは極左的ゼネラル・ストライキ路線を採る当時最大のフランス労働組合ナショナルセンターであった労働総同盟 CGT との対決路線であった。彼自身反教権的ジャコバン的左翼路線を採りながら、労働総同盟と正面から衝突したのはクレマンソーのジャコバン的愛国主義から起源していた。ドイツを愛しながらドイツを怖れていたクレマンソーは、フランスがアルザス-ロレーヌをめぐって戦争状態になった際に前線に兵員を輸送する鉄道のゼネラル・ストライキによる麻痺を強く怖れた。

クレマンソーは穏健な改良主義的労働運動を育成し、ゼネラル・ストライキを標榜する労働総同盟を禁圧しようとしたのであった。しかしこの時点でのクレマンソーの社会改良政策は成功しなかった。

フランスでは社会政策が立ち後れておりそれが改良主義労働運動の成長を阻害していると思ったクレマンソーは、労働省を設置して大臣にヴィヴィアニを任命し、社会問題に取り組んだ。社会立法の分野では元老院の抵抗を受けて多くの代議院で可決された法案が立法化を阻止された。労働者農民退職年金は元老院の委員会での修正で60歳開始から75歳に延期され、支給額も減

額された。

クレマンソーの社会改良路線と一線を分かつ労働総同盟は、強硬路線を突き進む。1908年をピークに労働総同盟との衝突が頻発する。激烈な労働者の運動はパリ郊外のドラヴェイユ-ヴィニュ Draveil-Vigneux の砂利採取労働者の同年のストライキ[(4)]で頂点に達した。同年6月2日にはヴィニュの建設労働組合事務所に進入した憲兵に2人のストライキ中の労働者が射殺された。

砂利採取労働者の2か月のストの後に、労働総同盟 CGT 傘下の建設労連は24時間のゼネラル・ストライキと7月30日のドラヴェイユでのデモ行進を指令した[(5)]。挑発者メティヴィエを使ってクレマンソーは鎮圧をはかったといわれる[(6)]。軍騎馬部隊はヴィニュで労働者の列を攻撃。ヴィルヌヴ-サン-ジョルジュ Villeneuve-Saint-Georges にバリケードを築き、デモ隊に対抗した。3人の労働者が死亡し200人が負傷し、多数が逮捕された。8月1日にはゼネストを決定するために集まっていた CGT 幹部が逮捕された。そして3日のゼネストは失敗した。労働総同盟書記長のグリフュルは3か月後に釈放された。彼は1909年2月24日に書記長はニエルに交代した。さらに7月13日当時無名のレオン・ジュオーが新書記長になった。彼は労働総同盟を革命的サンディカリズムから改良主義路線へと先導した[(7)]。最も左翼であると言われたクレマンソー首相は労働運動に最も強硬な弾圧政策をおこなった首相となった。

1914年の赤字国債は330億フランに達していた。その原因は税収のほとんどを間接税に頼っていたことである。そこで1907年2月7日にカイヨーは累進課税を含む所得税法を代議院に上程した。元老院はここでも引き延ばし作戦を行い、可決されたのは1914年7月のことであった。それも散々骨抜きされたあとのことであった。

1906年の総選挙は、1905年のパリ・グローヴ大会で左右両派の統一が果たされ統一社会党・労働者インターナショナル・フランス支部 SFIO が結成されたけれども、ミルラン、ブリアン、ヴィヴィアニらがこの党から去っていた時代に行われた総選挙であった。

議員たちの投票行動の分析を通して、その政治的立場を認知するとともに、合同に参加しなかった、あるいは直後に党を離脱した議員の投票行動から彼等の政治的態度の特徴を見いだしたい。

この時期の議員たちの投票行動分析は、ジャン-ジャック・フィシュテルの研究[(8)]があるので、これを踏まえて考察を深化させていきたい。

第２節　第９議院任期の政治的勢力配置図

1906年総選挙に始まるこの期間の代議院任期 législature は、1910年の総選挙による改選まで続く。この総選挙直後での勢力図は以下の通りである。（　）内は1902年総選挙と比較しての議席の増減数である。

■左翼

左派共和派（民主同盟）	90議席（＋28）
急進党	115議席（－14）
急進社会党	132議席（＋28）
統一社会党	54議席（＋11）
独立社会主義	20議席（＋20）

■右翼

保守派（君主制派と加担派）	78議席（＋６）
ナショナリスト（国粋主義派）	30議席（－18）
プログレティスト（穏健共和派右派）	66議席（－61）

またこの1906年６月８日－1910年４月８日任期期間の内閣は以下の通りである。

■1906年10月25日－1909年７月20日　第１次クレマンソー内閣

■1909年７月24日－1910年11月２日　第１次ブリアン内閣

次にこの代議院任期期間の主な政治的事件を年代順に列挙する。

◆1906年５月６日－20日：代議院の総選挙で左翼ブロック、とりわけ急進

共和-急進社会主義党が勝利した。

◆1906年10月25日　第 1 次クレマンソー内閣の成立

◆1908年：労働・社会保険省 Ministère du Travail et de la Prévoyance sociale の創立。

◆1908年：クレマンソー政権の「ストライキ破り」と呼ばれる強権的労働政策。社会党の激しい反対。左翼ブロックの崩壊。

◆1909年 7 月24日－1910年11月 2 日：第 1 次ブリアン内閣の時代。

◆1909年：ブリアン内閣の宗教的宥和政策。

◆1909年：議会内外で大きな反響を呼んだ政府の比例代表選挙制度支持キャンペーン

◆1910年 4 月24日－ 5 月 8 日：代議院議員総選挙

1899年のジャッピー大会から、四分五裂していたフランスの社会主義勢力は単一の社会党を結成しようとする統一の努力をおこなう。しかし1900年のヴァグラム大会でゲード派が途中退場し、1901年のリヨン大会でヴァイアン派も離脱し統一社会党結成の試みは失敗する。[(9)] だが翌年の1902年には社会党右派 PSF と社会党左派 PSDF の 2 つの社会党が結成され、これら 2 つの政党が統一社会党を結成することが最終の課題となる。ヴァルデク-ルソー「共和政防衛」内閣に商工大臣として入閣して統一社会党結成の障害となるミルランは社会党右派に合流したが、もはや右派に接近しすぎ、急進党とさえ対立していくミルランは、社会党右派からも歓迎されないようになり、1904年に同党セーヌ県連合から除名されて社会主義と訣別した。そしてミルランは保守派の代表的政治家となり、第 1 次世界大戦後には首相についで大統領に選ばれた。

統一社会党が結成されるためには国際組織である社会主義インターナショナルの介入を必要とした。1904年の社会主義インターナショナル・アムステルダム大会で議決された「ドレスデン決議」が採択されて、ジョレースたちはミルランの入閣を支持したことを批判され、統一勧告の決議が出され、

1905年の「グローブ大会」で統一が成し遂げられる。しかし、ブリアンやヴィヴィアニなど入閣をのぞむ社会党議員たちが統一社会党に参加しないかあるいは統一後に離反した。統一社会党結成グローブ大会の議事録によれば、党規約36条により県連合が議会社会党グループに派遣した議員の数、すなわち県連合所属の代議院議員として認めた上でグループに所属させた議員の数は42名であった。[10] しかしその後次回第２回シャロン-シュル-ソーヌ党大会での報告によれば38名に減少した。[11]

統一社会党結成以降、社会党議員が代議院でどのような投票行動をとったかを、以下で分析していく。

第３節　ルーヴィエ内閣の倒閣から第１次ブリアン内閣の終末まで

１．ルーヴィエ内閣とサリアン内閣の成立と没落

以下に１～31の議案（表-Ⅲ）についての説明を簡潔に行う。統一社会党結成によって「左翼ブロック」から離脱した統一社会党議員の内閣信任関連法案の議決にたいする投票行動であり、表-Ⅲの第１の議案、第２次議案、それに第４の議案である。第３と第５の議案は公務員のストライキに対する政府の対応についての議案である。また第６の議案と第７の議案は所得税についての議案であり、所得税課税については第１次世界大戦前夜まで政治上の大きな争点として続く。

第１の議案は、ラウール-ペレ RAOUL-PÉRET 議事日程 ordre du jour[12] について賛否を問う議案で、1906年３月７日に議会において賛成234票対反対267票で否決され、ルーヴィエ内閣の倒壊をもたらした。

すでに統一を果たしている社会党は、全体一致で政府に反対する票を投じた。1906年に明確化する統一社会党の「左翼ブロック」からの離脱を明確に示す投票行動であった。

第２の議案は、長時間の審議の後に、1906年３月14日にムージョ-クイバ Mougeot-Couyba 議事日程案を賛成304票対反対183票で可決して、サリアン内閣指名信任投票[13]に途をひらいた議案である。

統一社会党の多数派は棄権したが、アルディ ALDY[14]、バリー BASLY、カドゥナ CADENAT、ドゥヴェズ DEVÈZE、フルニエ FOURNIER、ラマンダン LAMENDIN、パストル PASTRE、ロブラン ROBLIN[15]、ルアネ ROUANET、セル SELLE、ヴェベル VEBER[16]の11名の議員は賛成投票した。党の「左翼ブロック」から離脱する方針に背き、急進党よりの立場を採った議員たちの投票行動であった。彼ら全員統一社会党の議員であり、1906年の時点でも「左翼ブロック」からは完全には離脱しておらず、急進党との関係が断ち切れていなかったことを物語る。

第3の議案は、郵便配達労働者のストライキに対するサリアン内閣の政策（社会党のマルセル・サンバらが政府を批判した[17]）を信任するドゥヴィル信任議事日程（第1部）案が1906年4月12日に賛成412票対反対53票可決されて、政府の方針が通った。政府案に賛成したアルディ議員を除く全議員が反対投票をした。

第4の議案は、サリアン内閣に対する第2次指名信任決議であって、急進派は何人かの社会党議員の賛成投票を当て込んだが、社会党議員は全員反対投票を投じた。しかし1904年6月15日に議決されたギュヨ-デセイニュ-カイヨー GUYOT-DESSAIGNE-CAILLAUX 信任通常議事日程とよばれるこの議案は賛成400票対反対88票の大差で可決され、サリアン内閣は信任された。全社会党議員が署名するこれに対抗する議事日程案を提出したが、反対505票対賛成55票で却けられた。

第5の議案はストライキに参加して処分を受けた公務員を「出来る限り dans la plus large mesure possible」恩赦で再雇用するとする決議案であったが、1906年7月11日に採決され、賛成137票対反対343票で否決された。

第6の議案は、1907年度予算を審議していた1906年7月12－13日に、穏健共和左派＝「民主共和連盟 Alliance républicaine démocratique」の財務大臣ポワンカレが与党のペルタン、カイヨー、ギュヨなどの急進社会主義議員からなる「左翼委員会 délégation des Gauche」と財政問題で衝突し、4種の直接税を所得税累進課税に一気に置き換えること拒否し漸進的に置き換え

表-Ⅲ　1906－1910年会期の社会党議員の投票行動

				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
				1906年3月7日 ルーヴィエ内閣の例期を凍いたRaoul Péret議事提案ordre du jour の票決	1906年3月14日 Mougeot-Couyba内閣信任議案ordre du jour 票決	1906年4月12日 Deville決議案（第1部）の票決	1906年6月21日 Guyot の内閣信任議案ordre de jour 票決。第2次サリアン信任期間	1906年7月11日 Groussier決議案projet de résolution 票決	1906年7月12-13日 Guyot-Dessaigne議案ordre de jour 議事優先についての票決	1905年11月22日 Mauvian信任議案ordre de jour（第2部）の票決	1906年11月5日 Rabier議事提案。クレマンソー内閣信任の票決	1906年11月13日 Maryan議事提案ordre de jour の票決	1906年12月6日 Gosdidier-Meguillart信任議案の票決	1906年12月7日 西部鉄道国有化法案projet de loi の票決
			統一までの所属政党	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果
1	アルベール-プーラン	ALBERT-POULAIN	PSF	C	棄権	欠席	C	P	P	P	棄権	P	棄権	P
2	アルディ	ALDY	PSF	C	P	P	C	P	P	P	棄権	P	C	P
3	アラール	ALLARD	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
4	アルマーヌ	ALLEMANE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
5	バリー	BASLY	PSDF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	C	P
6	ベドゥース	BEDOUCE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
7	ベネゼック（任期中死去）	BÉNÉZECH	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	P	C	P
8	ブラン	BLANC	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	P	P	P	棄権	C	C	P
9	ブーヴェリ	BOUVERI	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
10	ブイソン	BOUISSON	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
11	ブルトン（除名）	BRETON	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	棄権	P
12	ブルース	BROUSSE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	棄権	P
13	カブロル	CABROL	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
14	カドゥナ	CADENAT	PSDF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	C	P
15	カルリエ	CARLIER	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	P	P	P	棄権	C	C	P
16	ショーヴィエール	CHAUVIÈRE	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
17	コンペール-モレル	COMPÈRE-MOREL	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
18	コンスタン	CONSTANS	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
19	クータン（除名）	COUTANT	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
20	デジャント	DEJEANTE	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
21	ドゥロリ	DELORY	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
22	ドゥヴェーズ（除名）	DEVÈZE	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	棄権	P
23	デュボワ	DUBOIS	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
24	デュカルージュ	DUCAROUGE	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
25	デュフール	DUFOUR	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
26	デュール	DURRE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
27	フェレーロ	FERRERO	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
28	フィエヴェ	FIEVET	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
29	フルニエ（除名）	FOURNIER	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
30	フランコニ	FRANCONIE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
31	ゲスキエール	GHESQUIÈRE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
32	ゴニオ	GONIAUX	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	C	P
33	グルーセ	GROUSSER	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
34	ゲード	GUESDE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
35	ジョレース	JAURÈS	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
36	ラマンダン	LAMENDIN	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	C	P
37	ラサール	LASSALLE	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	P	欠席	欠席
38	ルコワント	LECOINTE	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
39	マリエトン	MARIETTON	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P

12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
1907年 1 月29日　Allard 修正案 amendement の票決	1907年 3 月13日　Gast-Delon クレマンソー政府信任議案 ordre de jour の票決	1907年 5 月15日　Steeg、Dumont が署名した左翼代表部の議事提案 ordre de jour の票決	1907年 5 月14日　Maurian 議事提案 ordre de jour（労働組合権について の政府利用）の票決	1907年 6 月21日　Reinach 政府信任議案 ordre de jour の票決	1908年 1 月28日　Dubief 議事提案 ordre de jour（第 2 部）の票決	1908年 2 月27日　カイヨー所得税議案 projet について の Aimont 修正案 amendement の票決	1908年 3 月13日　Delbert-Grosdidier 信任議案 ordre de jour の票決	1908年 4 月 6 日　Dubief 信任議案 ordre de jour（第 2 部）の票決	1908年 6 月11日　Dallimier-Chapius 議事提案 ordre de jour の票決	1908年10月23日　Colliard 議事提案 ordre de jour の票決	1909年 3 月 9 日　カイヨー Caillaux 所得税創設法案 projet de loi の票決	1909年 3 月19日　Reinach 政府信任案 ordre de jour（第 1 部）の票決	1909年 7 月12日　Malvy 政府信任案 ordre de jour（第 1 部）の票決	1909年 7 月20日　クレマンソー内閣辞職をもたらす Jourde 議事提案 ordre de jour の票決	1909年 7 月27日　ブリアン内閣信任 Drelon 議事提案 ordre de jour の票決	1909年11月 8 日　都選挙区制を支持する Larquier 先決問題 question préalable の票決	1909年11月 8 日　第 1 条と改革の票決	1910年 1 月24日　Dessoye-Buisson 議事提案 ordre de jour（第 2 部）の票決	1910年 3 月26,30,31日　労働者分担金を廃止するグード Guesde 修正案 amendement の票決
評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果	評決結果
棄権	C	P	C	C	C	C	C	棄権	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
C	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	C	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	P	C	P	C
P	C	棄権	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	C	C	P	P	欠席
P	C	棄権	C	C	C	C	C	C	C	棄権	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	C
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	棄権	C	P	P	C	C	C	棄権	C	C	P	C
C	C	P	C	C	C	C	C	棄権	C	P	P	C	C	C	棄権	C	P	欠席	C
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	P
P	C	棄権	C	C	C	C	C	C	C	C	P	C	C	C	欠席	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	欠席	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	C	P	C
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	C	C	C	P	P	欠席
棄権	C	棄権	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	C	欠席	C
棄権	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	C
欠席	C	棄権	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	棄権	C	C	棄権	欠席	C	P	C	棄権	C	P	C	C	P	C
P	C	P	C	C	棄権	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	P	C	P	P	C
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	欠席	欠席	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	棄権	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	欠席	欠席
P	C	P	C	C	棄権	C	C	C	C	P	P	C	棄権	C	棄権	C	C	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	欠席	C	P	欠席	欠席
棄権	C	棄権	C	C	C	C	欠席	欠席	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	欠席	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
棄権	C	棄権	C	C	C	C	欠席	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	欠席	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	欠席	P	C	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	欠席	欠席	P	欠席
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	欠席	棄権	C	P	P	P
C	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	欠席	C	P	P	P

				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
40	メラン	MELIN	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
41	メリエ	MESLIER	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
42	ミル	MILLE	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
43	ネクトゥー	NECTOUX	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
44	ニコラ、レアンドル	NICOLAT Léandre	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	C	P
45	パストル(除名)	PASTRE	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	棄権	P
46	ド プレサンセ	DE PRESSENSÉ	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
47	ロブラン	ROBLIN	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
48	ロニョン	ROGNON	PSF	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
49	ルアネ	ROUANET	PSF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	棄権	C	P
50	ロジエ	ROZIER	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	C	P
51	セル(除名)	SELLE	PSDF	C	P	C	C	P	P	P	棄権	P	C	P
52	サンバ	SEMBAT	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
53	ティヴリエ	THIVRIER	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
54	ヴァイアン	VAILLANT	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
55	ヴァレンヌ	VARENNE	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	P	C	P
56	ヴェベル	VEBER	PSDF	C	P	C	C	P	棄権	P	棄権	P	棄権	P
57	ヴィニュ	VIGNE	PSF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
58	ヴァルテル	WALTER	PSDF	C	棄権	C	C	P	P	P	棄権	C	C	P
59	ヴィルム(除名)	WILLM	PSF	欠席	欠席	欠席	C	P	P	P	棄権	C	C	P
		Pは賛成	賛成総数	309	265	350	317	322	331	194	257	246	240	106
		Cは反対	反対総数	117	240	187	203	233	218	315	300	304	265	322

PSF＝社会党右派（ジョレース派）　PSDF＝社会党左派（ゲード・ヴァイアン派）
【出典】 FICHETER, Jean-Jacques, Le Socialisme francais : de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre. op. cit., appendice

ると主張したが、「議会は４種の直接税を所得税累進課税に置き換え他の付加を認めない政府に信任をおき、審議を打ち切り通常議事日程にもどる」とする与党の「左翼委員会」が提案した議題であった。議会はこのギュヨ-デセイニュ議事日程案を賛成147票対反対389票で否決した。社会党の議員は棄権したヴェベルを除く全員がこの議事日程案に賛成投票をした。与党の議案が否決される異常な事態が起きた。

第７の議案は、（累進税ではない）所得税を支持するモジャン-デュモン-エモン MOUJAN-DUMONT-AIMONT 議事日程案であり、1906年７月13日に代議院はこの議事日程案を賛成433票対反対83票で可決した。社会党議員はこの議事日程に全員賛成投票をした。

２．第１次クレマンソー内閣と第１次ブリアン内閣（1910年総選挙以前）の時期の社会党議員の投票行動

第８の議案は、サリアン内閣が議会で不信任を受けていないにもかかわら

12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	欠席	C	P	P	P
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	棄権	C	P	P	P
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	P	P	C	C	C	棄権	C	P	P	P
C	C	P	C	C	棄権	C	C	棄権	C	棄権	P	C	C	欠席	P	欠席	欠席	P	C
C	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	棄権	欠席	欠席	欠席	欠席	P	P
棄権	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	P
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	C	C	C	C	P	P	P
C	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
C	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
欠席	C	P	C	C	C	棄権	C	C	C	棄権	P	C	C	欠席	棄権	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	C	C	C	C	C	P	P	棄権
P	C	P	C	C	C	C	C	棄権	欠席	棄権	P	C	C	C	棄権	C	P	P	C
棄権	C	P	C	C	C	C	C	棄権	C	棄権	P	C	C	C	棄権	C	棄権	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	欠席	C	C	棄権	C	P	P	P
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	P	C	C	棄権	C	P	P	C
P	C	P	C	C	C	C	C	C	C	棄権	P	P	C	C	C	C	P	P	P
300	203	228	228	307	307	283	306	366	420	27	318	319	411	366	420	27	318	319	411
9	312	322	320	245	245	272	241	144	90	507	230	147	85	144	90	507	230	147	85

ず登場した第 1 次クレマンソー内閣を信認に導くラビエ RABIER 議事日程の議案である。1906年11月 5 日にこの議事日程案は賛成376票対反対94票で可決された。

クレマンソー内閣は所信表明演説で文明世界の平和を、我々の独立の究極的保障を武装した力で守り抜くと暗にドイツとの対決姿勢を示したが、 2 年兵役法を維持し、軍事法廷に反対する意思をも表明する。そして政教分離法の厳格な実施を強調したうえで、差し迫った課題として社会問題に着手することを、労働社会保険省を設置し、急ぎ労働者退職年金法を制定することを決意表明した。

これから以下で述べる社会党議員の投票行動が分裂する第 9 の議案、第10の議案、第27の議案、第31の議案によって1902年から第 1 次世界大戦前夜の1914年までの社会党の投票行動を分析したフィシュテルは社会党議員の政治的傾向を 6 派に色分けした。(18) 詳細な説明は後述する。

第 9 の議案は、1906年11月13日の審議で政教分離法の徹底的実施をもとめ

るマリアン MARIEN 議事日程の議案で、賛成391票対反対143票で可決された。

この議案に対しては、社会党議員の投票行動が最も鮮明に分裂した。

賛成18票で、賛成票を投じたのはアルベル-プラン ALBERT-POULAIN[19]、アルディ、バリー、ベネゼック、ブルトン BRETON[20]、カドゥナ、ドゥヴェズ、ゴニオ GONIAUX[21]、ラマンダン、ラサール、ニコラ NICOLAT、ブルース、パストル、ロブラン、ロジエ、セル、ヴァレンヌ VARENNE、ヴェベルの18議員であった。彼らのうち社会党左派 PSDF に属していた議員は皆無で、ブルース派の指導者ブルース以外は、そしてフランス労働党を離脱したベネゼックとカドゥナ、ドゥヴェズ、ブランキ派から除名されたブルトンなどミルラン入閣問題を機に党派からはなれて独立派社会主義者になった議員が多い[22]。

反対票は26票で、反対票を投じたのは、アラール、アルマーヌ、ベドゥス BEDOUCE[23]、ブラン BLANC[24]、ブヴェリ、カルリエ CARLIER[25]、ショーヴィエル CHAUVIÈRE、コンスタン、クータン、デジュアント、ドゥロリ、デュフール、デュル DURRE[26]、フェレロ、ゲスキエル、グルシエ、ゲード、マリエトン、メラン、メリエ、サンバ、ティヴリエ、ヴァイアン、ヴィニュ、ヴァルテル、ヴィルムの26議員であった。

彼らの多くはフランス労働党（ゲード派）か革命社会党（ヴァイアン派）に属し、ミルラン入閣問題時代にも離党したり除名されたりしなかった議員である[27]。

棄権したのは７票、デュボワ、フィエヴェ FIÉVET[28]、フルニエ、フランコニ、ジョレース、ドゥ プレサンセ、ルアネの７名の議員が棄権した。彼らの多くはジョレースやドゥ プレサンセのような慎重派であった。

以上の通り第９の議案に対する社会党議員たちの投票行動は、彼らの政治的経歴と所属する政治党派とおおいに関係していた。

第10の議案はクレマンソー内閣の第１次モロッコ（タンジール）事件後に国際情勢の緊張緩和をはかるアルヘシラス会談以後のフランス政府の外交に

懸念を示すジョレースらの政府批判[29]を打ち切るために提案された、グロディディエ-メキアル GROSDIDIER-MÉQUILLAET 信任議事日程案[30]である。この議事日程案は1906年12月6日に可決されジョレースをはじめとする社会党議員の多数派はこの議事日程案に反対したが、プラン、ブルトン、ドゥヴェズ、ブルース、パストル、セル、ヴェベルの7名は棄権した。彼らは際だった社会党内穏健右派の議員であった。

第11の議案は、クレマンソー内閣の公約であった、私営の西部鉄道網買収に関する法案で、1906年12月7日に採決され、賛成364票対反対187票で可決された。

社会党議員は全員賛成投票をした。鉄道国有化政策には社会党は賛成していたからである。

第12の議案は、社会党議員のアラールが提案したアラール修正案とよばれる公共集会と届出義務制度についての議案である。フランダン法案へのこの修正案は、賛成47票対反対466票で否決された。カトリック教会の公共集会への規制を緩和するフランダン法案に対し、規制緩和に反対するアラール修正案[31]については、反教権主義的傾向の強いヴァイアンやサンバの元社会革命党の議員など社会党の多数はこの修正案を支持したが、プラン、コンスタン、デジュアント、ゲスキエル、ゲード、ラサール、ロブラン、ヴェベルの8名は、おそらく公共の自由の拡大を支持するという視点から棄権し、宗教的寛容という視点からアルディ、ジョレース、マリエトン、ブルース、パストル、ドゥ プレサンセ、ルアネ、ロジエは反対した。この議案への投票行動では、反教権主義の徹底か、宗教的寛容か、公共の自由の拡大かで社会党議員の態度は分裂した。

第13の議案は、ストライキ中の電力産業の労働者を兵士によって肩代わりさせようとする政府に対する対政府糾問質疑 interpellation をジョレースが行い、1907年3月11日に議事日程案を上程したが、賛成86票対反対398票で却けられ、一方、政府が受諾したこの議案ガスト-ドルロン GAST-DRELON 信任議事日程案が賛成365票対反対66票で可決されて、ジョレースの

対政府批判決議は封じられた。

第14の議案は、逮捕された電力産業の組合活動家への寛容な措置をもとめる急進社会党を中心とする「左翼委員会」議事日程案であり、1907年５月14日に賛成135票対反対229票で却けられた。公務員労働者の団結権はサリアン内閣で事実上黙認されてき[32]たが、小学校教員組織が労働組合となり労働総同盟 CGT に加入すると、クレマンソー内閣はこれを許さず組合指導者を逮捕した。ジョレースは公務員の団結権と全国組織への加入する権利を要求して対政府糾問質疑をおこなった。そして上記の逮捕された組合活動家への寛容な措置をもとめる急進社会党を中心とする「左翼委員会」議事日程案が上程された。

社会党はジョレース、サンバ、ヴァイアンを含む多数派が賛成投票したが、ベドゥス、ベネゼック、カルリエ、コンスタン、デジュアント、ゲスキエル、ゲードの７名の議員が棄権した。これらゲード派議員はかねてより「アミアン憲章」などをめぐり労働総同盟と敵対しており、総同盟への援護を拒んだ投票をしたと見ることができる。

第15の議案は社会党議員たちが小学校教員組合の団結権への対政府糾問質疑を行った[33]のに対し、1907年５月14日に通常議事日程に戻るモージャン MAUJAN 議事日程案が提案され、賛成323票対反対205票で可決されて審議は閉じられた。社会党議員は全員議事日程案に全員が反対した。

第16の議案は、「加糖 sucrage」や「水増し mouillage」によるワイン価格大暴落により南フランスの葡萄栽培農民が大騒擾をおこした事態をめぐる議案である。1907年６月10日のフェルール・ナルボンヌ市長の辞任を皮切りに南仏の市長が次々と辞任し、抗議運動を組織したフェルールは逮捕され、南仏の地方行政は麻痺する[34]。ナルボンヌ、カルカソンヌ、ペルピニャン、モンプリエなど次々と南仏諸都市で騒乱が起き、クレマンソーは軍隊を出動させて暴動を沈静化させた[35]。かつてドレーフュス事件で盟友であったレーナック REINACH は政府を信任し、事態の平静化を急がせるレーナック信任議事日程案を６月21日に提案し、議事日程案は賛成327票対反対223票で可決さ

れた。社会党議員は全員反対投票をした。

第17の議案は1908年１月24日と28日の政府の対モロッコ政策に対するジョレースの対政府糾問質疑をめぐる議案である。ジョレースによれば当時のスルタン・アブド-エル-アジズは国内で孤立してスルタンの地位を追われようとしていた。この事態にフランスが介入することはモロッコ国民の反発を招き、フランスが孤立すると警告した。[36] しかし議会は内政には干渉せず、アルヘシラス協定 acte d'Algésiras を実施し、正当な防衛を保障する政府を支持し、既定の議事日程にもどるとするデュビエフ DUBIEF 議事日程案を、１月28日に賛成426票対反対87票で可決して、審議を打ち切った。

ジョレース、ゲード、ヴァイアン、サンバを含む社会党議員の多数派はこの議事日程案に反対したが、ドゥヴェズ、デュボワ、フルニエ、パストルの４名の議員は棄権した。４名とも社会党内穏健右派の議員であった。

第18の議案は、４つの直接税を廃止して所得税を導入するという急進党のかねてからの公約で、所得税法を阻止しようとして提案され、1908年２月27日に議事にかけられたエモン AIMOND 修正案は賛成134票対反対381票で否決された。この修正案にはクレマンソー首相とカイヨー財務相も強く反対した。

社会党議員はセルが棄権したほかは、全員反対した。当然ながら議案によっては与党と足並みをそろえたのである。

第19の議案は、軍から除籍処分を受けていたクレマンソーの盟友ジョゼフ・レーナックを騎兵隊大尉に復籍させる議案が審議されていたが、社会党議員ポール・コンスタン[37]などから対案として出されていた復籍と同時にネグル NÈGRE 小学校教員組合書記長とストライキで解雇された郵便配達労働者を復職させることを拒否するこのデルベール-グロディディエ DELBERT-GROSDIDIER 信任議事日程案を、1908年１月13日に賛成326票対反対113票で可決した。社会党議員は全員この議事日程案に反対した。

第20の議案は、政府を信任する議会は、遅れていた西部鉄道の買収や労働者退職年金法案、所得税累進課税法案を与党にのみ依拠して実現することを

もとめるデュビエフ議事日程案で、1908年４月６日に賛成319票対反対86票で可決された。

ジョレース、サンバ、ヴァイアンを含む社会党議員の多数はこの議事日程案に反対した。ゲードは欠席。プラン、ブルトン、ドゥヴェズ、フルニエ、ラサール、ブルース、パストル、ヴァレンヌ、ヴェベルの９議員は棄権した。これら９人は社会党内穏健右派の議員であった。

第21の議案は、1908年６月２日にドラヴェイユ-ヴィニュで砂利採取労働者はストライキに突入し、デモンストレーションを行い、軍隊と衝突しストライキ労働者に１名死者が出て、同年６月11日にこの事件について急進党のダリミエ DALIMIER と社会党のヴィルム WILLM が対政府糾問質疑をおこなった際に提出された対抗する議案である。ヴィルム議事日程案は先議権を認められず、このダリミエ-シャピュイス DALIMIER-CHAPIUS 議事日程案が賛成407票対反対59票で可決された。社会党議員の投票行動は『官報 Journal Officiel』には記載がないが、フィシテルの研究書の表Ⅲによれば欠席した９名以外全員反対投票をしたと記されている。

第22の議案は、1908年10月23日に共和派の議員デシャネル DESCHANEL が労働総同盟の主体となっている革命的サンディカリストの行動について対政府糾問質疑を行った際に、保守系議員から労働総同盟の解散がもとめられ、ヴィヴィアニ労働大臣は解散に否定的であると答弁するが、これを受けて同日提案されたコリアル議事日程案である。この議事日程案は政府の「宣言」に支持を表明し、賛成312票対反対53票で可決される。

社会党議員のジョレース、ゲード、ヴァイアン、サンバを含む多数派は棄権した。アラール、カルリエ、フェレロの３議員は反対投票をし、ブルトン、ドゥヴェズ、フルニエ、ブルース、パストルの５名の議員は賛成投票をした。反対した議員は党内左派、賛成した議員は党内右派と考えられる。

第23の議案は、1909年３月９日に採決された所得税に関するカイヨー法案で、賛成388票対反対129票で可決された。

社会党議員は棄権票を投じたセルをのぞく全員がこの法案に賛成投票をし

た。

第24の議案は、1909年 3 月の郵便局職員のストライキを非難し、郵便局に平静を取り戻す政府を信任するレーナック信任議事日程案である。

パリの郵政公社 PTT 職員は1909年 3 月12日から15日にかけて電報中央局 Central thélégraphique 内で激しい示威行動をおこない、郵便局は半ばゼネラル・ストライキの様相をとった。郵便局員は特にシミャン SIMYAN が内部昇進制度を恣意的に実施したとして攻撃した。代議院は1909年 3 月19日に長時間の審議の後に郵便局職員のストライキを非難し、郵便局に平静を取り戻す政府を信任するレーナック信任議事日程案を賛成346票対反対118票で可決した。社会党議員は全員この議事日程に反対した。

第25の議案は、クレマンソー内閣の政策全体に信任を与えるマルビ MARVY 信任議事日程案である。この議事日程案は賛成333票対反対151票で可決された。社会党議員は、棄権したドゥヴェズ、フルニエ、パストルを除き全員議事日程に反対した。

第26の議案は　海軍調査委員会 Commission d'enquête sur la Marine 報告の審議についての、クレマンソー内閣の総辞職をもたらすジュールド JOURDE 議事日程案である。1909年 7 月20日にこの議事日程案は賛成176票対反対212票でその審議優先権が否決され、クレマンソー内閣は倒された。かねてより海軍力の整備が進まず、事故による損傷も問題とされ、最終的にはデルカッセ海軍調査委員会委員長と衝突し、少数派となり大統領に辞任を申し出た。フィシテルの著書の別表によれば（本文には記載がない）、社会党の議員は欠席した12名の議員以外47名全員が反対票を投じている。

第27の議案は、1909年 7 月27日に大統領によるブリアン内閣の指名を信任するドゥレロン-アジャム DRELON-AJAM 議事日程案であり、賛成306票対反対46票で可決された。

社会党は分裂し、ジョレース、サンバら多数派30名の議員は棄権した。これに対し17名の議員[(38)]は反対し、ドゥヴェズ、フルニエ、パストルの穏健右派議員は賛成した。

第28の議案は、ラルキエ LARQUIER 議員が提案した現行の郡選挙区選挙制度 scrutin d’arrondissement を支持する先決問題 question préalable 案の議案である。

1909年10月と11月に比例代表制選挙制度が審議された際に、社会党議員のブルトン（翌年に党を除名されて、ブリアンの社会主義共和派に移る）はこの選挙制度を批判する演説を行った。社会党は全体としてこの選挙制度に賛成していて、サンバとジョレースは賛成演説を行った。急進党に近いラルキエ LARQUIER 議員は現行の郡選挙区選挙制度 scrutin d’arrondissement を支持するこの先決問題 question préalable の議案を提案したが、賛成187票対反対345票で否決された。

社会党は賛成したブルトン、バリー、ショーヴィエル、クータン（社会党統一後間もなく社会党を離党）、ラマンダンを除き、全員この先決問題に反対した。賛成した議員の多くは、党を離党したり除名された議員を含む党内右派議員である。

第29の議案は、比例代表制選挙制度の原則をみとめる法案であった。比例代表制選挙制度の原則が議会通過確実かと思われていた時、名簿制比例代表制選挙制度を定める法案第１条が可決される直前に、この制度の主唱者であった首相ブリアンは豹変して採択反対の立場を採った。この議案は1909年11月８日に賛成225票対反対291票で否決された。

第28の議案に賛成票を投じた郡選挙区選挙制度に賛成の議員が投じた反対票と、もう一方で第28議案に反対したが、この議案が通るとブリアン内閣不信任になるので意見を変えた議員からなる反対票は、賛成票を上まわった。

社会党は、郡選挙区選挙制度に賛成のバリー、ブルトン、ショーヴィエル、クータン、ラマンダンと、ブリアンを支持したドゥヴェズ、フルニエが反対投票をした。ヴェベルは棄権した。その他の社会党議員は政府に反対する投票を、つまり法案に賛成する投票をした。反対投票をした議員はおおむね党内右派議員である。

第30の議案は、公教育予算に関するデソワ-ビュイソン議事日程案であっ

た。予算審議の際にアラール議員が国家による教育の独占に反対する演説をして社会党のグルシエ、アルマーヌ、ヴァレンヌの反論を受けた。しかし政府はこの議事日程を受け入れて1910年1月24日に採決した。ジョレースはこの議事日程が政府を信任する第1部と、教育の世俗化を定める第2部とを分けて採決することを提案し認められる。この議事日程第2部は賛成319票対反対147票で可決された。議事日程第1部は社会党が棄権し、第2部は全議員が賛成投票をした。

第31の議案は、労働者農民退職年金法案に対するゲードの対案である。1910年3月26日30日31日に行われた元老院を通過したこの法案について、元老院を通過した法案を修正できないことを問題とする。そして受給年齢が65歳と高齢過ぎること、手当が少額であること、そして賃金からの天引きであることを問題とした。ジョレースはヴァイアン同様に元老院案を修正すれば成立させないまま放置される恐れがあると指摘した。ゲードは労働者の掛金廃止をもとめた。サンバはゲードの退職年金法案に反対して修正案を出す意味があるのかと疑問を呈した。ジョレースも同様の主旨の発言をした。1910年3月26日30日31日に審議と採決が行われ、賛成27票対反対466票の圧倒的多数でゲード修正案は否決された。

社会党議員で反対投票をした議員はジョレース、サンバを含め27人の議員、賛成投票をしたのは25人の議員、棄権がヴァイアン一人であった。たしかに賛成投票者にはゲード派あるいはゲード派に近い議員が多いが、ヴァイアン派は賛否に分かれ、ヴァイアン自身は棄権した。この投票による政治的色分けはことのほか難しい。

第3章　1910年－1914年第10回代議院任期 Dixième Législature 時代の社会党の投票行動

はじめに：第10回代議院任期時代の全体的政治構図

1910年の総選挙は4月24日と5月8日に投票が行われた。

右翼は12議席ほど減らした。597議員中325議員が比例代表制選挙制度への支持と変わった。

■与党・左翼

共和左派（共和同盟）	73議席（前82議席）
急進・急進社会主義党	261議席（前269議席）
統一社会党 SFIO	75議席[39]（前55議席）
独立社会主義派	32議席（前20議席）

■野党・右翼

保守派	129議席（前78議席）
（保守派のうちプログレティスト	75議席（前60議席））
自由主義派（アクション・リベラル）	20議席（前66議席）

与党は統一社会党抜きでも急進派261議席、共和左派73議席、独立社会主義派30議席で過半数を確保できた。左翼ブロック時代の終わりとなった。

またこの1910年６月１日－1914年４月４日任期期間の内閣は以下の通りである。

1909年７月24日－1910年11月２日　第１次ブリアン内閣（２つの代議院任期にまたがる）
1910年11月３日－1911年２月27日　第２次ブリアン内閣
1911年３月２日－1911年６月23日　モニ内閣
1911年６月27日－1912年１月11日　カイヨー内閣
1912年１月14日－1913年１月18日　第１次ポワンカレ内閣
1913年１月21日－1913年２月18日　第３次ブリアン内閣
1913年２月18日　レイモン・ポワンカレ大統領
1913年２月18日－1913年３月18日　第４次ブリアン内閣
1913年３月22日－12月２日　バルトゥ Barthou 内閣
1913年12月９日－1914年６月３日　第１次ドゥメルグ内閣

1914年6月9－13日　第4次リボ内閣
1914年6月13日－8月26日　第1次ヴィヴィアニ内閣

次にこの代議院任期期間の主な政治的事件を年代順に列挙する。
◆与党が不明確になり、政治が不安定化した。
◆社会と社会主義者の動揺と騒乱。政府の態度の反動化
◆1911年　南仏で社会的騒擾が引き続いた
◆1911年7月1日　アガディール事件（第2次モロッコ事件）
◆カイヨー-ドゥ・セーヴル紛争とカイヨー内閣の倒閣
◆第1次ポワンカレ内閣の成立と政治の右傾化：挙国内閣へ
◆1912年3月30日　モロッコに総督府：保護領化
◆比例代表制選挙制度をめぐる闘い
◆1913年2月17日　ポワンカレが大統領に当選。
◆第4次ブリアン内閣と比例代表制選挙制度の失敗
◆1913年8月7日　三年兵役法の成立
◆1914年3月16日　カイヨー夫人がカルメットを射殺
◆4月26日・5月10日　総選挙で反戦平和・民主派が勝利した

第1節　第1次（1910年総選挙以降）・第2次ブリアン内閣時代の統一社会党議員の代議院における投票行動

第1の議案（以下「表-Ⅳ[40]」による）は、第1次ブリアン内閣の総選挙後の指名信任投票であり、エスHESSE議事日程とよばれ、1910年6月28日に採決され、賛成404票対反対121票で可決された。

一方社会党はアルベル-トマが代表して対政府糾問質疑を行った。トマの質疑はブリアンの政策全般について提案の形をとった議事日程案で、社会党75名の署名が付された議案であった。その提案には教育の拡充、累進所得税制度、国際協調による漸進的関税の引き下げ、最低賃金制と8時間労働制、

表-Ⅳ　1910－1914年会期の投票行動

				1	2	3	4	5	6	7	8
				1910年６月28日　Hesse の議案票決（第１部）	1910年10月30日の内閣弁明請求の票決。	1910年10月30日　Raynaud 内閣信任案 ordre du jour の票決	1910年11月９日　Grosdidier 政府信任案 ordre du jour の票決	1911年１月23日　Guesde 緊急提案 ordre du jour。1910年４月５日法廃案の票決	1911年２月11日　Sembat 先決動議 motion préjudicielle の票決	1911年２月24日　Delon 信任案 ordre du jour（第１部）の票決	1911年３月６日　Chautemps 信任案 ordre du jour の票決
			旧所属政党	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果
1	アルベール-プーラン	ALBERT-POULAIN	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
2	アルディ	ALDY	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
3	オーブリオ	AUBRIOT	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
4	バルト	BARTHE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
5	バリー	BASLY	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
6	ベドゥース	BEDOUCE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
7	ベトユ	BETOULLE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
8	ブエ-アレックス	BOUHEY-ALLEX	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
9	ブイソン	BOUISSON	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
10	ブーヴェリ	BOUVERI	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
11	ブルニエ	BRENIER	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
12	ブリケ	BRIQUET	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
13	ブリゾン	BRIZON	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
14	カブロル	CABROL	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
15	カドゥナ	CADENAT	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
16	カメユ	CAMELLE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
17	ショーヴィエール	CHAUVIÈRE	PSF	欠席(死去)	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
18	コリー	COLLY	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
19	コンペール-モレル	COMPÈRE-MOREL	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
20	デジャント	DEJEANTE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
21	ドゥロリ	DELORY	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
22	ドワジ	DOIZY	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
23	デュブレド	DUBLED	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
24	デュカルージュ	DUCAROUGE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
25	デュフール	DUFOUR	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
26	デュマ、シャルル	DUMAS, Charles	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
27	デュマ、エミール	DUMAS, Emile	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
28	フォール(除名)	FAURE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
29	フルマン	FOURMENT	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
30	ゲスキエール	GHESQUIÈRE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	欠席
31	ゴニオ	GONIAUX	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
32	グード	GOUDE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
33	グルーセ	GROUSSER	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
34	ゲード	GUESDE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
1911年6月22日　多数決投票制を支持するMalavialla修正案amendement の票決	1911年6月15日に1910年4月5日法の廃案をもとめるGuesde、Brizon議案ordre de jour の票決	1911年6月15日にDalimier政府信任議案ordre de jour 票決	1911年6月23日にモニMonis内閣倒閣をもたらす議事提案ordre de jour の票決	1911年6月30日にカイヨー内閣信任Breton - Dalimier議事提案ordre de jour の票決	1911年12月20日　赤道アフリカ独仏領分割確定の票決	1912年1月16日にポワンカレPoincare内閣信任議事提案ordre de jour の票決	1912年3月22日にRaynaud議事提案ordre de jour の票決	1912年7月1日　フランス・モロッコ協定convention法案projet de loi の票決	1912年7月10日　選挙制度改革法案projet de loi の票決	1913年1月24日にブリアン内閣信任Chéron議事提案ordre de jour の票決	1913年5月27日　兵役法案projet de loi の票決	1913年7月7日　3年兵役法loi の票決	1913年11月18日　選挙制度改革法案projet de loi の票決	1913年12月2日　バルトゥーBarthou内閣倒閣をもたらすDelpierre修正案amendement の票決	1913年12月11日　ドゥーメルグ内閣信任のパンルヴェPainleve議事提案ordre de jour（第1部）の票決
票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果	票決結果
C	棄権	P	C	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
P	P	棄権	C	欠席	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	C	C	P	C	C	C	P	C	C	C	C	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	欠席	棄権	C	C	棄権	C	C	P	C	C	C	欠席	欠席	欠席
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
C	P	C	棄権	C	P	C	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
C	棄権	P	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
C	棄権	P	C	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	棄権	P	P	棄権
棄権	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	棄権	C	C	C	P	P	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
C	P	棄権	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	P	棄権
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	P	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	棄権	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	欠席	C	C	C	P	C	棄権
C	P	棄権	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	欠席	P	欠席	欠席
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	欠席	欠席	欠席	欠席
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	棄権	C	C	P	C	棄権
欠席	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	C	棄権	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	P
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	棄権	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	棄権	C	P	棄権	C	棄権	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	棄権	C	C	棄権	棄権	棄権	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権

				1	2	3	4	5	6	7	8
35	ジョレース	JAURÈS	PSF	C	P	C	C	棄権	P	C	棄権
36	ラグロジリエール	LAGROSILLIÈRE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
37	ラマンダン	LAMENDIN	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
38	ロシュ	LAUCHE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
39	ラヴォー	LAVAUD	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
40	ルコワント	LECOINTE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
41	ロスト	LHOSTE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
42	マニュス	MANUS	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
43	マリエトン	MARIETTON	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
44	モージェ	MAUGER	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
45	メリエ	MESLIER	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
46	ミル	MILLE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
47	ミストラル	MISTRAL	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
48	モル(除名)	MOLLE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
49	ミランス	MYRENS	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
50	ネクトゥー	NECTOUX	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
51	ニコラ、レアンドル	NICOLAT Léandre	PSF	C	P	C	C	P	P	C	欠席
52	ド・ラ・ポルト	de LA PORTE	PSF	C	P	C	C	P	P	欠席	棄権
53	プレヴォ	PRÉVOT	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
54	ラファン-デュジャン	RAFFIN-DUGENS	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
55	ルブール	REBOUL	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
56	ランギエ	RINGUIER	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
57	ロブラン	ROBLIN	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
58	ロニョン	ROGNON	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
59	ルアネ	ROUANET	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
60	ルージェ、ユベル	ROUGER, Hubert	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
61	ルー-コスタド	ROUX-COSTADAU	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
62	ロジエ	ROZIER	PSF	C	P	C	C	棄権	P	C	棄権
63	サバン	SABIN	PSF	C	P	C	C	P	欠席	欠席	欠席
64	セル	SELLE	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
65	サンバ	SEMBAT	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
66	シクスト-ケナン	SIXTE-QUENIN	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
67	タルブーリエック	TARBOURIECH	PSF	C	P	C	C	P	欠席(死去)	欠席	欠席
68	ティヴリエ	THIVRIER	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
69	トマ、アルベール	THOMAS, Albert	PSF	C	P	C	C	棄権	P	C	棄権
70	ヴァイアン	VAILLANT	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
71	ヴェベル	VEBER	PSDF	C	P	C	C	棄権	P	C	棄権
72	ヴィニュ	VIGNE	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
73	ヴォワラン	VOILIN	PSF	欠席	P	C	C	P	P	C	棄権
74	ヴァルテル	WALTER	PSDF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
75	ヴィルム	WILLM	PSF	C	P	C	C	P	P	C	棄権
		Pは賛成	賛成総数	309	265	350	317	322	331	194	257
		Cは反対	反対総数	117	240	187	203	233	218	315	300

PSF＝社会党右派（ジョレース派）　SDF＝社会党左派（ゲード・ヴァイアン派）

【出典】 FICHETER, Jean-Jacques, Le Socialisme francais : de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre. op. cit., appendic

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
C	C	P	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	C	棄権	C	C	P	C	C	C	欠席	欠席	棄権
欠席	棄権	棄権	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	C	C	欠席
C	P	C	棄権	C	棄権	C	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	P	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	棄権	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	C	C	P
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
欠席	P	C	欠席	C	欠席	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	棄権	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
欠席	欠席	欠席	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	欠席	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	C	C	P
C	棄権	P	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	欠席	C	欠席	C	C	C	P	C	P
C	棄権	棄権	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	P	C	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	C	C	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	棄権	P	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	棄権	棄権	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
C	P	C	棄権	C	棄権	棄権	C	C	P	C	C	C	P	C	棄権
246	240	106	300	203	228	228	307	307	283	306	366	420	27	318	319
304	265	322	9	312	322	320	245	245	272	241	144	90	507	230	147

傷病手当、フランス銀行の国有化など幅広い要求を網羅し、決議案の形式をとった議事日程案として提出された。トマの議事日程案は賛成80票対反対458票で否決された。

第２の議案は10月30日の代議院で社会党がブリアン首相を特別背任罪 haute trahison で特別弾劾裁判所 Haute Cour に起訴する請求 demande で、この請求には全社会党議員が署名したが、賛成76票対反対464票で否決された。しかし翌々日の11月２日には第１次ブリアン内閣が信任を受けることができず総辞職した。

事の発端は、1910年10月10日に北部鉄道は賃金引き上げ、週休制などをもとめ無期限ゼネラル・ストライキに突入し、12日に他社の鉄道員を軍に動員し，翌日には北部鉄道の鉄道員も21日間軍に動員された。13日には労働組合の指導者を逮捕させ、ストライキ委員会との話し合いを拒否した。[41] 18日にはストライキ委員会はストライキ労働者に職場復帰を命じた。1910年10月25日に新年度会期が開始された直後の代議院に議論の場は移され、首相は鉄道が国防の要であり、法を超えた手段に訴えることができると主張したが、結局倒閣に追い詰められる。

第３の議案は、代議院が鉄道ストライキについての審議を閉じるための、政府が受け入れたレイノー RAUNAUD 議事日程案であり、1910年10月30日に賛成329票対反対183票で可決された。

社会党議員は全員この議事日程案に反対票を投じた。

11月２日のヴィヴィアニ労働大臣辞職の受諾は、前述のブリアン内閣の倒閣をもたらした。

第４の議案は、11月９日に、ジョレースたちに新内閣（第２次ブリアン内閣）の無策と反動的政策を攻撃された行き詰まった際に、グロディディエ信任議事日程案が提案され、賛成296票対反対206票で可決されて、一時的に苦境を脱した。

社会党議員は全員議事日程案に反対した。

第５の議案は、1901年４月５日の労働者農民退職年金法全条項を廃案にし

て、賃金からの天引き制度を廃止し100,000フランを超える相続税への累進課税を当てる社会党議員ゲードの緊急提案であった。この緊急提案は賛成152票対反対357票で否決された。

社会党議員はジョレース、ロジエ、トマ、ヴェベルの 4 名をのぞく全員が署名した。これら 4 名は棄権し、残りの全議員は賛成を投票した。

第 6 の議案は、1911年 2 月23日の 2 隻の軍艦 cuirassés を着工する法案に対する社会党議員サンバの先決動議 motion préjudicielle であって、事前にドイツやイギリスなどの列強と相互的軍縮のための会談を開くことを提案する内容であった。この動議は賛成187票対反対354票で否決された。しかし近くひらかれるハーグ会談にむけて列強の友好国・同盟国と合意するように政府に求めるシャルル・デュモン Charles DUMONT 決議案が賛成451票対反対46票で可決された。

社会党議員全員がサンバ先決動議にもデュモン決議案にも賛成投票した。

第 7 の議案は、急進社会党のマルヴィ MALVY とポール・ムニエ Paul MEUNIER が政府の修道会についての立法に対政府糾問質疑をした際に、ブリアン首相が奨励した対カトリック宥和政策を信任するドゥレロン議事日程案第 1 部である。1911年 2 月24日に提案されたこの議事日程案は賛成262票対反対238票の僅差で可決された。社会党議員は全員議事日程案に反対した。彼の政策を支持する多数派の維持がこれ以上不可能と考えた第 2 次ブリアン内閣は間もなく総辞職した。

第 2 節　モニ内閣時代の統一社会党議員の代議院における投票行動

第 8 の議案は、大統領にから首相に指名されたモニ MONIS に対する信任投票となったショータン議事日程案であった。この議事日程案は1911年 3 月 6 日に提案され、賛成309票対反対114票で可決され、新首相にはモニが就任した。

社会党はストライキで解雇された鉄道員の復職も比例代表制選挙制度も示されていなかったので失望し、全員棄権した。

第９の議案は、1911年６月22日にマラヴィアル MALAVIALLE によって提案された多数決制投票制度（すなわち郡選挙区選挙制度）を復活させる修正案であり、賛成223票対反対341票で否決された。この日社会党議員グルシエが報告者となって、比例代表名簿制選挙制度が審議されていた。ジョレースはこの時多数決＝郡選挙制度を痛烈に批判したが、この選挙制度によって利益を得ている急進党などの与党を離反させる結果となったとフィシュテルは指摘する。(42)

社会党議員は棄権したブリゾン BRIZON(43) と賛成投票をしたバリーを除き全員が反対投票をした。

第10の議案は、第５の議案をほぼ同じ形で蒸し返したゲード、ブリゾンら元ゲード派が提案した議事日程案である。この法案は既に1910年に通過し、1911年７月から実施される予定の労働者退職年金法を廃止して賃金からの天引き制度を廃止し100,000フランを超える相続税の課税を割り当てる議事日程案で、1911年６月15日に採決され、賛成107票対反対417票で否決された。ゲード、ヴァイアンらの社会党議員多数派52名は賛成投票をしたが、サンバなどの元社会党左派議員を含む19名が棄権し、ジョレースだけが反対投票をした。いまだもってゲード派の教条的非妥協的投票行動が持続していることが確認できる事例である。

第11の議案は、政府の労働者退職年金法を評価し、受給年齢の引き下げなどさらなる改善を望んで、政府を信任するというダリミエ信任議事日程案であり、1911年６月15日に採決されて、賛成359票対反対60票で可決された。社会党の投票が分裂したのはこの議事日程案第２部についてであり、反対票を投じたのはゲード、ヴァイアンを含む社会党の多数派45名の議員で、ジョレース、バリー、ルアネ、ヴェベルなど14名は賛成し、サンバ、ヴァルテルなど左派議員を含む11名が棄権した。

第12の議案は、1911年６月23日に、戦時の軍最高司令部 haut　comandement の組織化の問題についての A. エスの対政府糾問質疑と最高司令部における陸軍大臣の役割についてのビアンネイメ BIENAIMÉ 提督の対政府

糾問質疑の終了後に、ビアンネイメたちから提案された 3 つの議事日程案とエスから提案された単純かつ純粋な議事日程案の 4 つの議事日程案の議事日程が提案されたが、採決された第12の議案は政府が却けた最後の単純かつ純粋な議事日程案であり、賛成248票対反対224票で可決され、モニ内閣は不信任をうけて総辞職した。

社会党議員のゲード、サンバ、ヴァイアンをふくむ多数派は棄権し、ジョレースら19名の議員は政府を支持して反対し、ゲード派のコンペール-モレルだけが政府に反対して賛成投票をした。ゲード派とヴァイアン派が棄権してモニ政権を間接的に擁護したのは注目に値する。

第 3 節　カイヨー内閣以降の時代の統一社会党議員の代議院における投票行動

第13の議案は、大統領に指名されたカイヨー首相を信任するブルトン-ダリミエ議事日程案であり、1911年 6 月30日に採決され、賛成367票対反対173票で可決され、カイヨー政権は信任された。カイヨーは採決の前に選挙改革や世俗化擁護政策や鉄道員の復職、そして労働者農民退職年金法の改善をおこなうことを所信表明した。

社会党議員は棄権したフォール FAURE をのぞいて全員がこの議事日程案に反対した。

第14の議案は、フランスとドイツの間で1911年11月 4 日に結ばれた赤道アフリカでの国境画定の協定に関する批准法案であり、1911年12月20日に賛成393票対反対36票で批准された。既に同年12月15日、16日、19日そして20日と議会で審議され、社会党の代議士ではヴァイアンが植民地主義を批判しながら、平和をもたらしたたことを評価し、ジョレースは臨時的平和の基礎をもたらしたが、宿命的戦争の危機への異議申し立てであると述べ、コンペール-モレルはブルジョア政府の外交に賛成も反対もしないとのべて棄権する意思表示をした。

ジョレース、サンバ、ヴァイアンを含む社会党議員の多数派は賛成投票し

たが、コンペール-モレルやゲードら24名の議員は棄権し、ブーレ-アレックスとラグロジリエルの２名は反対した。

第15の議案は首相に指名されたポワンカレ POINCARÉ を信任するダリミエ議事日程案であり、1912年１月16日に賛成440票対反対６票で可決され、第１次ポワンカレ内閣は信任された。ポワンカレは外交でのフランスの権益の擁護と共和派の団結をうたった。

社会党議員はこの議事日程案に反対したバリー、ブーベリ、ブリゾン、ラマンダンをのぞき全員が棄権した。

第16の議案は、1912年３月22日のレイノー議事日程案であり、この日外交についての討論の際に、ジョレースはスペインおよびドイツとの秘密条約と協議による（à l'amiable）協定の取りやめを要求し、サンバはポワンカレ政権に敵対的議事日程案を提出したが、政府は政府を信任するレイノー議事日程案によって切り抜けた。この議事日程案は賛成413票対反対81票で可決された。社会党議員は全員この議事日程案に反対した。

第17の議案は、モロッコにフランス総督府を組織して、モロッコを保護国化するフランス-モロッコ協定の批准案であり、1912年７月１日に賛成443票対反対85票で批准された。社会党議員は棄権したグルシエをのぞく全員が反対投票をした。

第18の議案は、1912年７月10日の代議院の会議で採決された選挙制度改革法案であり、賛成339票対反対217票で可決された。この法案は多くの比例代表制選挙制度支持者からも批判されたが、アパラントマン制度[44]を保持する選挙制度であったからである。

社会党議員はバリー、ラマンダン、ルー-コスタド ROUX-COSTADAU の３議員が反対し、ブリゾンが棄権した以外は、全議員が賛成投票をした。

第19の議案は、首相に指名されたブリアンを1913年１月24日に議会で信任するシェロン CHÉRON 議事日程案であった。ジョレースは選挙制度改革の敵対者である上に政治路線が不明瞭であると批判した。この議事日程案は賛成324票対反対77票で可決され、第３次ブリアン内閣は信任された。

賛成票を投じたフェルディナン・フォールと棄権したデュマ DUMAS 以外の社会党議員全員が反対票を投じた。しだいに社会党はブリアンから離反していった。

第20の議案は、やがて同年 8 月に可決される 3 年兵役法で兵役が 1 年延長することを見越して、必要とされる経費を陸軍大臣に認める法案である。3 年兵役法反対運動を率いてきたジョレースは猛反対した。しかしこの法案は賛成386票対反対165票で可決された。

社会党議員は全員反対投票をした。

第21の議案は、1913年 7 月 7 日に第18条第 4 項で 3 年間の現役兵役 service actif を定める兵役法の原則についての法案で賛成339票対反対223票で可決された。

社会党は労働力不足と農村部での過疎化をまねき、出生率を低下させるとして反対した。社会党議員は棄権したブリケ BRIQUET をのぞく全員がこの法案に反対した。

第22の議案は、比例代表制選挙制度を定める法案で、1913年11月18日に賛成333票対反対225票で可決された。しかし1914年の総選挙では比例代表制選挙制度は実施されなかった。

社会党議員は反対票を投じたバリー、ラマンダン、モル MOLLE、ルー-アレックスの 4 名の議員を除き全員が賛成票を投じた。

第23の議案は、軍事費特別予算とモロッコ派兵のための利子 3 %の国債発行にたいするデルピエール DELPIERRE 修正案[45]である。バルトゥ BARTHOU 政権への信任をかけたこの修正案は1913年12月 2 日に採決され、賛成265票対反対290票で否決されバルトゥ内閣は信任を得られず総辞職した。この修正案には社会党議員全員が反対票を投じた。

第24の議案は、1913年12月11日に採決されたパンルヴェ PAINLEVÉ 信任議事日程案第 1 部であり、賛成293票対反対137票で可決された。この議事日程案には首相に指名されたドゥメルグ DOUMERGUE への信任をも含んでおり、信任を受けて第 1 次ドゥメルグ内閣が成立した。

ドゥメルグ内閣は貧困層ではなく富裕層への課税によって軍事費を確保しようとしたが、３年兵役法に反対した社会党議員は、賛成票を投じたフォール、モル、ルー-アレックス、セルの４名の議員を除き、全員が棄権した。

結びに代えて

以上で1902年から1914年の第１次世界大戦開戦までの社会党・社会主義派の議員たちの投票行動を見てきた。投票行動の分析から、ここで次のような仮説的結論を導き出せる。

1．第１次世界大戦開戦まで社会党議員の間での旧党派間（主として元社会党右派 PSF と社会党左派 PSDF）の投票行動における分裂は解消されなかった。

2．しかし反バチカン、反教権主義、政教分離法にたいしては表-１の第20の議案と表-Ｉの第50の議案を除けば分裂することが稀であった。

3．また国際関係における平和を擁護し、たかまる戦争の脅威とたたかうことをもとめられた議案（２年兵役法・３年年兵役法やモロッコ問題）については、社会党内部での分裂は最小にとどめられた。

4．社会党が内心期待して裏切られたクレマンソー内閣とブリアン内閣にたいしては社会党が全体として不支持の色合いを濃くしていった。これは全体的な投票行動の変化であって、それほどの不統一をもたらさなかった。

5．また急進党や急進党を与党とする内閣の信任問題は、コンブ内閣信任とサリアン信任の議案をのぞいては、それほどの不統一は見いだすことができなかった。

6．しかし累進制所得税課税や労働者退職年金法案については、労働者の負担をめぐって社会党左派と社会党右派の方針が大きく食い違う場合が多く、投票行動においても分裂した。

7．累進制所得税課税や労働者退職年金法案などの労働者の負担をめぐっ

ては、階級闘争についての教条的・硬直的理論を信奉するゲード派・元ゲード派が非妥協的でありつづける。

8．兵役法や政教分離法にたいしては反軍国主義と反教権主義的傾向が強いヴァイアン派・元ヴァイアン派が強硬な反対派であった。

9．時には右派と左派の色分けでは単純に理解できないバリー、グルーセ、ショーヴィエルなどの投票行動もあった。

付け加えればフィシュテルの研究には社会党議員の投票行動から判別した、議員の政治的傾向についての 3 つの表が付されている。筆者は議員を投票行動による政治的傾向の分類を行わなかった。その理由はまずは議員の経歴や所属政党、そして所属政党をどのように変えていったかの政治的履歴や、コミューン、ブーランジェ運動、パナマ事件とドレーフュス事件、そしてミルラン入閣問題とコンブ内閣等の反教権主義政策への対応、第 1 次世界大戦前の国際的危機にたいしてとった態度などと、投票行動の整合性があったかについて検討・分析した。これまで取り上げてきた議案に対する社会党議員の投票行動については稀にしか予想外の投票はなかったと確認しているが、しかし想定外の例外的投票行動がなかったわけではなかった。想定内にしても予想外にしても、事後的にあらゆる要素を分析して説明しようと試みた。

しかし投票行動から議員の政治的傾向の類型化を試みたフィシュテルの研究を 1 つだけ紹介しておくのは、無視するよりも一応言及して検討したほうが良いと考えてここに紹介する。 3 つの表のうち一番妥当性があると思われるのは次頁（34頁）の別表-Ⅰ「左翼から右翼までの傾向」であると筆者は考える。

この別表で注意しておくべきことは 1 期しか議員に当選しなかった議員や任期途中で死去した議員はデータが少ないので類型化は難しい。ミルランのように右傾化して社会党を離党あるいは除名された議員は、旗幟が鮮明になるので議員は分類の妥当性が判断しやすいが、必ずしも政治的傾向の分類と一致しない。ショーヴィエルは文末の表-Ⅱの第46の議案に反対投票を投じ

たので最左派に分類するのは無理がある。バリー、グルーセ、ショーヴィエルなどは議案によって投票行動が一貫しないので分類は難しい。さらに言えばアルベール・プランを無所属に分類しているのは間違いであると思われる。

比較のためにもう一つの政治的傾向の分類（別表-II）を以下に掲げる。

この比較によって明らかになるのは別表-Ｉで社会党左派 PSDF に分類されていた議員が、ヴァイアンは不明、サンバとヴァルテルは反教権的現実派（確かにサンバはかなり現実派なのであるが）ゲード、コンスタン、デジュアントらは反教権的ではない強硬派（確かにゲード派はヴァイアン派ほど反教権的ではない）に分類されているが、ヴァイアンが不明に分類されているのは理解しがたい。彼は「反教権的強硬派」に分類されて然るべきである。社会党左派のグルシエが反教権主義的でも現実主義に分類されているのも問題がある。バリーは別表-Ｉでは極左派に位置づけられているが、別表-IIでは入閣派に分類されているのは矛盾がある。

このようにどの議案を判断基準にするかによって分類が大幅に入れ替わるという問題が生じる。

別表-Ｉ　「左翼から右翼までの傾向」（1902年－1908年）(46)

フランス社会党 左派PSDF	フランス社会党 右派PSF極左	フランス社会党 右派PSF左翼	フランス社会党 右派PSF中道	フランス社会党 右派PS右翼	フランス社会党 右派PSF親急進党
Allard	Bénézech	Basly	Bagnol	Jaurès	Millerand
Bouveri	Cadenat	Selle	Boyer	Breton	Deville
Constans	Meslier	Veber	Calvinhac	Briand	Salis
Coutant	Piger		Camuzet	Carnaud	Viollete
Dejeante			Cardet	Charpentier	
Delory			Devèse	Colliard	
Dufour			Ferrero	Lassalle	
Sembat			Fournier	de	
Thivrier			Grousset	Pressensé	
Vaillant			Hugue	Rouanet	
Walter			Krausse	（以下無所属）	
（以下PSF）			Lamendin	Desfarges	
Chauvière			Pastre		
			（以下無所属）		
			Albert-Pouain		

第１次バルトゥ内閣のもとで、1914年４月26日－５月10日に最後の総選挙が行われる。選挙結果は統一社会党が102議席を獲得して大勝利を収め、急進共和・急進社会党、急進左翼をあわせて261の議席を獲得し、共和連盟の議席を足すと、350議席近くで安定した与党を形成することが出来た。

一方野党は合計75議席で74も議席を減らした。統一社会党は与党ブロックから離脱して久しいが、第１次世界大戦開戦とともに神聖連合に参画し、大臣をだす。

社会主義共和派はヴィヴィアニやブリアンなど第１次世界大戦前夜と大戦中に幾度か首相を輩出する。

■与党

急進共和・急進社会党	195議席（＋46議席）
急進左翼	66議席（－47議席）
共和連盟	88議席（＋16議席）

■野党

穏健共和右派（共和主義連合）	37議席
アクション・リベラル	23議席（＋３議席）

別表-Ⅱ　主要な政治的傾向（1906年－1910年）（フィシュテル著、既掲書132頁）(47)

反教権的強硬派	強硬派	反教権的現実派	現実派	入閣派	不明
Allard Blanc Bouveri Cartier Delory Dufour Melin Meslier Thivrier	Bedouce Constans Dejeante Ghesquière Guesde Marietton	Allemane Chauvière Coutant Durre Ferrero Groussier Sembat Vigne Walter	Albert-Poulain Dubois Fievet Franconie Jaurès Lassalle de Pressensé Roblin Rouanet Veber	Aldy Basly Breton Brousse Devèze Fournier Goniaux Lamendin Pastre Roziet Selle Varenne	Cadenat Nicolat Vaillant

右翼諸派	15議席
■社会主義派	
統一社会党 SFIO	102議席（＋27議席）
社会主義共和派	24議席（－８議席）
■その他	
無所属	51議席
合計	601議席

全体的に見て、左翼急進党と社会主義政党の勝利ではあったが、３年兵役法は見直されることがなく、選挙制度改革は実施されないままであった。世界大戦が迫って財政不足から大戦前夜に所得税法は議会を通過し、大戦中に具体化する。

第１次世界大戦後の最初の総選挙では左翼諸政党が大敗し、「ブロック・ナショナル」が圧勝する。社会党は1920年のトゥール大会で多数派共産党と少数派社会党に分裂する。戦後の時代はこの研究の埒外の出来事である。しかし戦後に地歩を築いた保守系政治の先頭に立つのはミルラン入閣問題で社会主義勢力を分裂させたミルランである。また1924年総選挙で勝利した「左翼カルテル」を担うのは急進党のエリオ、ダラディエとともに元社会党の指導者の一人であったブリアンであった。

この時代の社会主義勢力と社会党は、総体的に考察するならば、両大戦間期の第３共和政、特に「左翼カルテル」と「人民戦線」ブルム内閣の時代を考察するうえでも重要な時代であると言うことが出来る。

（１）　代議院議員の任期は４年であり、議会の解散はなかった。

（２）　Jean-Baptiste DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque». La France et les Français. 1900-1914*. Paris. Éditions Richelieu. p. 253

（３）　クレマンソー、ジョルジュ、CLEMENCEAU, Georges, 1841年に保守系の地盤ヴァンデの共和主義の伝統のある医師の家に生まれた。そして彼も医学を学ぶ。1865年からアメリカで教師として生活し、アメリカ女性と結婚して1870年にフランスに戻

った。コミューン期にモンマルトル（XⅧ区）の区長となり、1875年パリ市議会議長を経て、翌年代議士に選ばれ、1877年に再選された。1879年以降オポルチュニスト内閣の、特にジュール・フェリーの敵対者として知られ、「内閣倒し屋」と呼ばれた。1883年にパナマ事件に巻き込まれて政界から遠ざかり、1902年にヴァル県から元老院議員に選ばれてようやく返り咲いた。ドレーフュス事件では再審派として活躍。ゾラの「私は弾劾する」を彼が編集主幹を務める「オーロール」紙に載せた。この記事の題を考えたのも彼である。はじめて首相になったとき彼は65歳であった。この高齢の政治家は第 1 次世界大戦中にふたたび活躍の場を見いだす。ソヴィエト連邦がブレスト-リトフスクで同盟国側と講和を結び、アメリカ軍がヨーロッパに大挙上陸するまでの間に連合国側が敗戦の直前まで危機に追い込まれた時に、第 2 次クレマンソー内閣（1917年11月16日－1920年 1 月18日）を組閣して、蔓延していた前線で抗命・不服従、銃後での厭戦気分を強圧的に取り締まり、フォッシュ元帥を連合軍最高司令官にすえてドイツ軍にたいする大反撃を組織して戦勝に導いた。Pierre PIERRARD ; *Dictionnaire de la Troisième République*. Larousse, Paris, 1968, pp. 65-69

（4）　ドラヴェイユ-ヴィニュ Draveil-Vigneux の砂採取労働者のストライキについては JULLIARD, Jacques ; *Clemenceau, briseur de grève. L'affaire de Draveil-Villeneuve-Saint-Georges*. Collection Archives Juillard. Paris, 1965, pp. 85-86 を参照。

（5）　DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque». op. cit*., p. 286, REBÉRIOUX, Madelaine ; *La République radicale?. 1898-1914*, Nouvelle histoire de la France contempolaine 11. Seuil, Paris. 1975. pp. 113-115

（6）　かなり広まった噂であるこの挑発者についての議論は、JULLIARD ; *Clemenceau, briseur de grève. op. cit*., pp. 143-174 を見よ。クレマンソー自身がメティヴィエに会見しようとしたことを示す文書がファクシミリでエルヴェ HERVÉ の新聞「社会戦争 Guerre sociale」紙に公表され、スキャンダルとなった。

（7）　DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque». op. cit*., p. 286

（8）　FICHETER, Jean-Jacques, *Le Socialisme français : de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre. Gèneve*, Librairie Droz, 1965 p. 291

（9）　この統一社会党結成の試みが失敗した過程については拙稿「ドレーフュス事件から第 1 次大戦までの社会主義派議員の代議院での投票行動(1)」『國學院法學』第53巻第 2 号、2015年 9 月、119頁、注（5）に掲げた拙稿を見よ。

（10）　Parti socialiste (Section Française de l'Internationale Ouvrière) ; *1er et 2e congrès nationaux tenus à Paris en Avril 1905 et à Chalôn-sur-Saône en Octobre 1905. Compte compte rendu analytique*. Paris, Au siège du Conseil National., s.d, p. 39 グローブ大会の議員名簿からジェロー-リシャールやブリアン、コリアールなど 9 名がグローブ大会後に党を去った。

(11)　フランス社会党・SFIO 第２回大会の議事録によると、統一社会党結成に参加して第２回大会まで離脱しなかった議員はアルディ（オード県）、アラール（ヴァル県）、バニョル（セーヌ県）、バリー（パ-ド-カレー県）、ベネゼック（エロー県）、ブエ-アレックス BOUHEY-ALLEX（コート-ドル県）、ブーヴェリ（ソーヌ-エ-ロワール県）、ブルトン（シェル県）、カドゥナ（ブッシュ-デュ-ローヌ県）、カミュゼ（コート-ドル県）、カルデ（セーヌ県）、カルノー（ブッシュ-デュ-ローヌ県）、ショーヴィエル（セーヌ県）、コンスタン（アリエ県）、クータン（セーヌ県）、デジュアント（セーヌ県）、ドゥロリ（ノール県）、ドゥヴェーズ（ガル県）、デュフール（アンドル県）、フェレロ（ヴァル県）、フルニエ（ガル県）、ジョレース（タルン県）、ラビュシエル LABUSSIÈRE（オートヴィエンヌ Haute-VIenne 県）、ラマンダン（パ-ド-カレー県）、ラサール（アルデンヌ県）、メリエ MESLIER（セーヌ県）、パストル（ガル県）プーラン（アルデンヌ県）、ド・プレサンセ（ローヌ県）、ロブラン（ニエーヴル県）、ルアネ（セーヌ県）、セル（ノール県）、サンバ（セーヌ県）、ティヴリエ（アリエ県）、ヴェベル（セーヌ県）、ヴィニュ（ヴァル県）、ヴァルテル（セーヌ県）の38名であるとされている。グローブ大会以降に６名減少したことになるが、実際には９名減少している。記載ミスでピジェが名簿から抜け落ちており、カルノーは大会の会議で名簿から除外された。アルディ、バリー、ショーヴィエル（社会党左派 PSDF の議員として1902年の総選挙で当選したが、グローブ大会では議員名簿に記載されていない）、ラマンダンの４名は統一時からあるいはグローブ大会の後に統一社会党の議員になっている。ロブラン議員は統一直後の補欠選挙で当選した。Parti socialiste ; *1er et 2e congrès nationaux Compte compte rendu analytique*. op. cit. p. 57

また統一に参加しなかった議員はオーガニュル AUGAGNEUR（ローヌ県）、オージェ AUGÉ（ロワール県）、バロン BARON（ブッシュ-デュ-ローヌ県）、ボワイエ（ブッシュ-デュ-ローヌ県）、ブリアン（ロワール県）、コリアール（ローヌ県）、ドゥヴィル（セーヌ県）、ジェロー-リシャール（ガドループ県）グルーセ（セーヌ県）、クロヴィス-ユーグ CLOVIS-HUGUES（セーヌ県）、イズアール（バス-アルプ県）、ノルマン NORMAND（ローヌ県）、ゼヴァエス（イゼール県）の計13名と記されている。*Ibid*., p. 58 ただしカルノー議員が統一した党に加入しているかについて所属するブッシュ-デュ-ローヌ県連から疑問が呈せられ、ピジェ議員は加入議員名簿から漏れていること、シャルパンチエ議員（参加議員名簿にはもとから記載されていない）は統一に参加していないことが所属するロワール県連合から指摘をされて議事録を訂正している。*Ibid*., pp. 77-79 つまり統一に参加した議員は38名で差し引き数字に変わりがなかったが、統一に参加しなかった議員数は１名増えて14名となる。統一によって失われた議員数は過小評価できないほどに多かった（特にブッシュ-デュ-ローヌ県、ローヌ県、ロワール県など南部と中部リヨン地方からの脱落が目立った）

が、1906年で11名議席を増やしたので埋め合わせされた。統一に参加しなかったか、統一に参加したが間もなく党を離脱した議員はオーガニュルやブリアン、コリアールのように独立社会主義者として政権に参加したものと、ドゥヴィルやゼヴァエス（1910年以降）のように間もなく議会活動から引退したものとがいる。ドゥヴィルは外交の分野に進出した。Jean MAITRON（sous la direction de）; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. Troisième partie : 1871-1914. de la Commune à la Grande Guerre*. Tome 12, Paris. Les Éditions ouvrières. 1974. p. 48 ゼヴァエスは1910年の総選挙に敗北した後に文筆業に専念する。弁護士としてはジョレースの暗殺者の弁護を引き受けた。

1905年の統一に参加しなかった議員はフランス社会党右派 PSF の側がかなり多いように思われるが、オージェやボワイエ、ドゥヴィル、ゼヴァエスは元ゲード派であり、ブルトン（統一後間もなく除名）は元ヴァイヤン派に所属していた。

1906年総選挙では統一社会党は11名議員を増加させて、総計54議席を獲得した。しかしフィシュテルの表-Ⅲによれば1906－1910年の代議院には統一社会党の議員が59議席を有していたことになっている。この数字には総選挙の後に補欠選挙で当選したブイソンやコンペール-モレル、デュカルージュ DUCAROUGE、ルコワント LECOINTE、ミル MILLE、ロニョン ROGNON の 6 名の議員も含まれているし、ブルトンなどの統一前後に除名された 7 名の議員たちも数えられているので数字は正確には54名という数に合致しない。FICHETER ; *Le Socialisme français*. op. cit., appendice. TABLEAU N°. III

(12)　フランスの議会では通常議事日程（イギリスのアジェンダ agenda に当たる）は毎週「議長会議（議会議長・副議長・常任委員会議長らからなる）」で決められており、それ以外の法案や修正案は新たな議事日程としてその都度議決する。議決後通常議事日程に戻るとその後に新たな議案は採決される。

(13)　第 3 共和政では大統領が首相を指名し、議会が信任する。ちなみに大統領には元老院の合意を得れば解散権はあるが、首相には議会の解散権はない。ただしマクマオン大統領による1877年 6 月25日の 1 回限りの解散を除けは第 3 共和政の大統領は解散権を行使しなかった。この解散以降、大統領の解散権行使はタブーとなった。

(14)　アルディ、マリ、ポール、エミール、フェリックス、ALDY, Marie, Paul, Émile, Félix（1853年－1921年）。トゥルーズ大学とエクス大学で法学を学び、故郷のアヴェロン県ミヨで弁護士になったアルディは、ついでナルボンヌの検事になり、地方議員を経てナルボンヌ第 2 選挙区から代議士に当選、1906年、1910年、1914年にも再選された。社会党統一にも参加した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op. cit*., t. 10. pp. 124-125

(15)　ロブラン ROBLIN、Pierre, Loouis-Henri（1877年－1916年）。ニエーヴル県の弁護士。1906年の補欠選挙と総選挙で代議士に当選。*Ibid*., t. 15, pp. 70-71.

(16)　ヴェベル、アドリアン、ジャン、フランソワ VEBER, Adrien, Jean, François,（1861年－1932年）。パリの弁護士。パリ市議、パリ市議会副議長、セーヌ県議を経て1902年の総選挙で代議士に当選し、1906年、1910年、1914年にも再選された。第１次世界大戦中は徹底抗戦派を通した。*Ibid*., t. 15, pp. 70-71.

(17)　*Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés.le 13 avril 1906, Séance du 12 avril*, pp. 1747-1749

(18)　FICHETER ; *Le Socialisme français : de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre. op. cit*., p. 132, annexes

(19)　アルベル-プラン、ガエタン、ALBERT-POULAIN, Gaétan,（本名プラン、アルベール POULAIN, Albert）（1866年－1916年）。機械工作労働者。アルデンヌ県の代議士。アンジェに生まれ、パリに出て金属労働者となり、アルマーヌ派に所属してアルデンヌ県に移り、労働組合運動の活動家となった。1898年にメジエール第２選挙区から代議士に当選。1899年のジャッピー大会以降、社会主義勢力の統一のために努力した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op. cit*., t. 14, pp. 301-305

(20)　ブルトン、ジュール-ルイ、エミール、BRETON, Jules-Louis, Emile,（1872年－1940年）科学者として学士院会員となる。1898年の総選挙でブールジュ第２選挙区からヴァイアン派＝中央革命委員会の候補として代議士に当選。ミルラン入閣を支持してヴァイアン派から除名された。社会党統一には加わったが、1910年に党から除名され、社会主義共和派に加盟した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op. cit*., t. 11, pp. 51-53.

(21)　ゴニオ、シャルル、GONIAUX, Charles,（1872年－1960年）。ノール県の炭鉱労働者。フランス労働党に加入し、1902年の総選挙で同県のドゥエ Douai 第１選挙区から「社会主義共和派候補」として代議士に当選。社会党統一に参加。1906年、1910年、1914年、1920年に再選された。*Ibid*., t. 12, pp. 302-303

(22)　ポシビリスト＝ブルース派のリーダーであるブルース、アルマーヌ派のアルデンヌ県連合の指導者アルベル-プランを除けば、アルディ、バリー、ベネゼック、ブルトン、カドゥナ、ドゥヴェズ、ゴニオ、ラマンダン、ラサール、ニコラ、パストル、ロブラン、ロジエ、セル、ヴァレンヌ、ヴェベルはミルラン入閣問題で揺れた時期に独立派社会主義者になり、多くは右派社会党を経て統一社会党に加わった議員たちである。

(23)　ベドゥス、アルベル、BEDOUCE, Albert（1869年－1947年）。トゥルーズ生まれのワイン商人。フランス労働党に加入、統一社会党に参加。1906年の総選挙でトゥルーズ第１選挙区から代議士に当選。同年最初の社会党トゥルーズ市長となる。1910年、1914年にも代議士に再選された。*Ibid*., t. 10, pp. 243-244

(24)　ブラン、アレクサンドル、マリウス、アンリ、BLANC, Alexandre, Marius,

Henri（1874年－1924年）ヴォクリューズ県の小学校教師。彼が所属するヴォクリューズ県連合は1900年にフランス労働党と分離したが、地元での左派社会党との友好的関係は続き、統一社会党にブランとともに合流する。1906年の総選挙でヴォクリューズ県から代議士に当選。1914年に再選された。第 1 次世界大戦中は反戦平和派として反戦派のキンタール大会に参加。*Ibid*., t. 10, pp. 304-305

(25)　カルリエ、ヴァンサン、ポール、CARLIER, Vincent, Paul（1859年－1917年）。黒檀・彫刻家具職人。パリに生まれ若くしてマルセイユに移住。1906年の総選挙で統一社会党 SFIO の候補としてマルセイユ第 5 選挙区から当選。クレマンソー内閣の政治と闘った。1910年の総選挙では落選した。*Ibid*., t. 11, p. 129

(26)　デュル、テオドル、アンリ、DURRE, Théodore, Henri（1867年－1918年）。ノール県ヴァレンシエンヌの出張販売員。フランス労働党に加入。1906年の総選挙で統一社会党の候補としてヴァレンシエンヌ第 2 選挙区から当選。1910年に落選したが、1914年に再選。1918年第 1 次世界大戦で戦死。*Ibid*., t. 12, pp. 128-129

(27)　アルマーヌとメリエはアルマーヌ派に属していたが、アラール、ベドゥス、ブラン、ブヴェリ、カルリエ、ショーヴィエル、コンスタン、クータン、デジュアント、ドゥロリ、デュフール、デュル、ゲスキエル、グルシエ、ゲード、メラン、サンバ、ティヴリエ、ヴァイアン、ヴィニュ、ヴァルテル、ヴィルムは左派社会党に所属していた。

(28)　フィエヴェ、ウジェヌ、アントワーヌ、FIÉVET, Eugène, Antoine,（1867年－1910年）。1906年の総選挙で統一社会党 SFIO の候補としてノール県カンブレ Cambrai 第 2 選挙区から代議士に当選。*Ibid*., t. 12, pp. 192-193

(29)　*Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés.le 13 avril 1906, Séance du 12 avril*, pp. 2952-2956

(30)　この信任議事日程案については *ibid., le 6 décembre 1906, Séance du 6 décembre*, p. 2963

(31)　アラール修正案についての議会の審議過程は *Ibid., le 29 janvier*, pp. 256-262

(32)　DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque»*. op. cit., p. 284

(33)　ブランの対政府糾問質疑については *Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés*. le 14 avril 1906 を見よ。

(34)　FICHETER ; *Le Socialisme français : de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre. op.cit*., p. 139,

(35)　DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque». op. cit*., p. 284

(36)　*Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés.le 24 janvier 1908*, p. 95

(37)　コンスタン対案については *Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés*. p. 546 et suite を見よ。

(38)　反対投票をしたのは、アラール、ベドゥズ、ブラン、ブベリ、コンペール-モレル、コンスタン、デジュアント、ヴァイアンに近いデュカルージュ、デュフール、ゲスティエル、ゲード、メラン、ロニョン、ヴァイアン、ヴィルムである。彼らの多くはゲード派かヴァイアン派に属しているか、近い議員で党内左派に属する。フィシュテルはビュイソン BUISSON を含め17人としているが、ビュイソンという議員は社会党にいない。ブイソン BOUISSON の間違いであると思われる。cf. FICHETER, *Le Socialisme français. op. cit*., p. 142

(39)　1910年－1914年代議院任期において、統一社会党の補欠選挙での当選者はいなかった。そのため75議席という数字は任期の最後まで変わりがなかった。しかし1910年総選挙から間もなくショーヴィエルとタルブリエシュ TARBOURIECH の２名の議員が死去している。

(40)　「表-Ⅳ」の議案は時期区分を明確にするためにフィシュテルが付した番号（32～55）によらず、筆者が独自に議案の番号を１から24までとしてあらためて付した。

(41)　FICHETER, *Le Socialisme français. op. cit*., pp. 181-182

(42)　*Ibid*., pp. 184-185

(43)　ブリゾン、ピエール、BRIZON, Pierre（1878年－1923年）。サン-クルー高等師範学校の学生時代にフランス労働党に入党し、フランス各地で師範学校教授などを歴任。統一社会党に参加したが、1906年の総選挙でグルノーブル第２選挙区から立候補して落選。1910年の総選挙で故郷のアリエ県ムラン第２選挙区から代議士に当選した。MAITRON；*Dictionnaire biographique.op.cit*., t. 11, pp. 64-67

(44)　選挙で名簿を合同して協力する政党の得票が過半数以上を占めると議席を独占することができる選挙制度で、第４共和政の1951年と1956年の選挙で実施された。

(45)　デルピエール修正案の審議過程は *Journal Officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des Députés.le 3 décembre 1913*, pp. 3728-3732 を見よ。

(46)　FICHETER, *Le Socialisme français. op. cit*., p. 113

(47)　*Ibid*., p. 132